「笹川杯作文コンクール 2012」～中国語で応募～ 第 6 回（11 月分）優秀賞作品

※原文に忠実に和訳しました。

※個人名の掲載については、本人の承諾を得ています。

菊埼先生

江蘇省　付昱

秋風が起きて、プラタナスの葉が落ち、古都南京にも寒さが増してきた。釣魚島の紛争が原因で、中日両国の関係も、風に舞う葉のように、どこへ飛んでいくか分からない。

私と菊埼先生とは、一昨年の初夏に知り合った。ちょうど大学に入って、ものの弾みで日本語学科を選んだ頃だった。私は毎日たそがれ時、山の競技場で夕日を浴びながらジョギングするのが習慣だった。いつも優しい顔つきのお年寄りが私の近くを一周また一周と疲れも見せず走っていた。ある日、彼が 1 人の学生と日本語で何か話しているのが聞こえた。私はしばらくためらってから、ぎこちない日本語で先生に声をかけた。ちょうど学校創立記念日が近かったので、その学生に学校創立記念プリントTシャツを手に入れる方法を尋ねていたのだそうだ。ちょうどその時、私には 1 着余分にあったので、寮に戻って彼に渡した。当初はささやかなエピソードだと思っており、先生との友情がそこから始まろうとは予想もしていなかった。

大学 2 年次、作文の授業は外国人教員が担当になった。授業開始の 10 分ぐらい前、書物を抱えてゆっくりと壇上に現れたのはなんと菊埼先生だった。彼は微笑みを浮かべて「皆さんこんにちは、菊埼威です。日本から来ました。」と挨拶した。最初の授業が終わると、先生は私の前にやって来て「君はTシャツをくれた学生だね。覚えているよ。」と声をかけてくれた。半年も前のささやかなことをまだ覚えていたとは、少し驚いた。

日本語を学ぶ前、私は日本と日本人に対して先入観を持っていた。菊埼先生に対する態度も、先生を尊重しようという気持ちだけだった。菊埼先生は私が付き合う初めての日本人だったので、どうしてもたくさん接触してたくさん調べようと思ってしまっていた。

先生は日本で退職した後、南京に来て引き続き教壇に立っている。彼の中国の歴史や文化に対する関心がとても強いのか、もう 5 年になるという。先生の話によると、初め彼は杖をついてよろよろと中国に来たそうだが、今やたとえ紫金山頂に登ったとしても、彼は元気なままだろうということだ。先生は、中国の自然の景色が素晴らしいお陰だと笑った。

ある授業で、菊埼先生は厳粛な顔をして「今日は 9 月 18 日です。皆さん起立してください。いっしょに 3 分間の黙祷をします」と言った。黙祷が終わると、彼はまた厳粛に「ありがとうございます」と言った。それから、彼は日本が中国侵略戦争で犯した様々な罪を話し始めた。先生は戦後生まれの世代で、戦争を極度に嫌っている。彼は先人達の過ちのために謝り、そして両国が代々友好的に付き合っていけることを望むと話した。

それから私は、映画で見る好戦的な日本人、今の日本の右翼が、もしかすると日本人全部を代表するものではないのではないかと感じ始めた。

私は次第に先生と打ち解け、よく食事や酒を共にするようになった。酒好きな先生は酒に強く、文章を書くのも好きだった。一番の憧れは、中国古代の詩人、酒に酔ってから不朽の名作を詠んだ李白だという。菊埼先生はまた遊びも得意で、祝日や休みにはいつも何人か学生を連れて名所旧跡を遊覧した。数年間で彼の足跡は長江の南北にまで及んだ。先生の体には私たちのような若い魂が住み着いているのだと私はいつも感じていた。

今年の中秋節、私は帰省に先生をお連れして、ついでに故郷の古跡をいくつか遊覧した。9 月に発生した釣魚島の紛争が原因で、国内の民衆には反日感情が高まっていた。先生の精神状態も今ひとつ冴えなくて、中日の友好関係が一瞬にして烏有に帰してしまいそうな様子を見て、彼は大層気をもんでいた。先生はもともとよく話

す人だったが、今回は無口になった。彼は、人の群れの中で無口でいないと中国人のように見えることはないからと言っていた。

ある教え子が結婚した時、菊埼先生は喜んで婚礼に出席したが、思いがけず他人に指を差され、「日本の奴」だと言われているのが聞き取れたそうだ。就職した教え子と雑談している時、気を遣って「君の会社の日本人従業員は反日デモを理由に帰国したかい？」と尋ねたところ、答えは「うちの日本人の奴らはみんな帰ったよ」だったという。先生はその時寒気が土踏まずからみぞおちまで貫通するのを感じて、かすかに痛んだと言っていた。

その日の後から、先生はついに病気にかかってしまった。菊埼先生の心中はとても苦しいはずだ。彼は中国の文化が好きで中国にやって来て、中国の学生に代々の友好の望みを見ていた。しかし、朝な夕な付き合った学生も、社会に出ると、中日関係が冷え込むや、日本に対する友好的な感情を簡単に捨ててしまった。彼は注いだ心血が無駄になったと思ったことだろう。

私は、私達のように日本語を学ぶ学生がいて、先生のように中国を心から愛し、平和を心から愛する日本人さえいれば、中日両国は代々友好的に付き合っていけると先生に言った。先生はそれでようやくいくらか気が楽になったようだ。

ここまで書いて、私は、また先生の最近やつれた顔を思い出してしまった。中日関係も先生のお身体も早く好転して欲しいと思っている。